

13 【きんかくし】

あるとき、懐爺のほうからきいてきました。

ぼくにおばけの話題がなにもないときは、きまって懐爺から声をかけてくれたものです。

「金ちゃんばかり、どうしておばけに遭遇するか、わかりますか」

「わからいでか」

ぼくは強がりでした。

「なら、いってみてください」

懐爺は笑いました。

「わしが、おばけを好きだからじゃ」

「残念でした」

「おばけが、わしを好きだからじゃ」

「残念でした」

「いらいらするのう」

ぼくは、せかせました。

「それは金ちゃんに、おばけを吸いよせる磁気（じき）が、あるからなんです」

懐爺は、断定（だんてい）しました。

「きせつ、みたいなもんかのう」

「それは時季。そうではなくて、磁石を持っている」

「じしゃくなんか、もつとらん」

「磁石はなくとも、金ちゃんの全身に磁気がある」

懐爺は、何となく説明に困っているふうでした。

ぼくはさらに困らせました。

「ならば、わしはまともじゃないんか」

「まともすぎるんですよ。鎧（よろい）をつけないから、おばけが吸いよせられる。これからもどんどん吸いよせられることでしょう」

「それは、ほめことばかのう。それは、おそろしいのう」

ぼくは少し、機嫌（きげん）が良くなりました。

嬉しはずかし、痛しかゆし、いやだいやだも好きのうち。そんな気分でした。

懐爺はうなづくかとおもったけれども、そうではありません。

「今日は、金ちゃんに一番関係のない、おばけの話をしましょう」

「どういういみかのう」

「金ちゃんに、吸いよせられないおばけです」

「だからわしは、あったことがないんか」

「おっしゃるとおり。その名も【きんかくし】」

何となく、いやな名前だと思いました。

【あかなめ】よりも。

「きんなら、かんけいあるじゃんか」

金ちゃんを神隠しにするのが、【きんかくし】かとおもいました。

「金ちゃんの金は、金科玉条（きんかぎよくじょう）の金ですが、【きんかくし】の金は、お金の金です」

「うちはびんぼうだから、たしかにおかねは、かんけいないのう」

ぼくは安心しました。

「【きんかくし】はお金を隠す。お金持ちなのに隠して、貧乏のふりをするのです」

「わしも、びんぼうのふりをしてみたいのう」

ぼくは本音をいいました。

すると懐爺は、少しこわい顔になって、こういったのです。

「【きんかくし】は困った顔や口ぶりで、貧乏人からお金をだましとるんです。【きんかくし】の大きな金庫（きんこ）は、お金ではちきれそうになっています」

「【きんかくし】は、しばいがうまいんじあのう」

「芝居ですか。そういう見方もありますね。それとだまされたほうが悪いという見方もある。でもね金ちゃん、だまされた人間が悪いなんて法律は、世界中どこにもありませんよ」

懐爺は、強くいいました。

懐爺はえらそうでした。

もしかすると、本当にえらいのかもしれない。

「そんじゃ、【きんかくし】を、たいじにいこうかのう」

私は勢いこんでみました。

「だから、金ちゃんは【きんかくし】に出逢えないんです」

懐爺は、断固（だんこ）としていました。

「たまたまみかけるくらいか。なら、【きんかくし】のしるしをおしえてくれ」

「【きんかくし】のしるしですか。胡散（うさん）臭い。狐狸（こり）の臭いがする。口臭がする。おならがひどく臭い。言葉が丁寧。おしゃべりが上手。身振り手振りで話す。相手の目をみつめて話す」

まだつづきそうだったけれども、ぼくはさえぎりました。

「なんじゃ。かいじいとおんなじじゃんか」

からかったのではなく、ぼくは実感（じっかん）をいったのです。

懐爺は沈黙（ちんもく）しました。

【きんかくし】のことは、もう一言も話すつもりはない。

そんな、「へ」の字の口でした。